



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 29号 2010.2.17 発行 社会政策研究所

平成 22 年度大阪府当初予算案の公表にあたって

平成 22 年 2 月 16 日、大阪府の 22 年度予算案が公表されました。

テレビでは夕方のニュースから、新聞では 2 月 17 日の朝刊で、論評を交えながら報道がされています。その一部を下記に紹介しました。

大阪手をつなぐ育成会の事業は、かつては大阪府の予算に大きく依存をしていました。しかし、平成 13 年度あたりから事業の軸足を障害福祉サービスに代表されるように、市町村事業に順次移行してきました。事務所も大阪府の建物から東成区玉津の民間ビルに移転しているとおりです。

その結果、他の障害者団体のように大打撃を受けるということはありませんが、その内容は結構厳しいものもあります。組織運営の助成を廃止することや、障害者向けの講習会、レクレーションやスポーツ活動、また地域の研修会などはおおむね 1 割の予算削減です。そしてなによりも、グループホームなどの機能強化加算が廃止という内容です。このようなことは、大阪府も取り立てて説明することも無く、テレビも新聞も記事になりませんが、しかし、職員のみなさんは知識として持っていたきたいところです。

さらにこの夏のさらなる事業見直しに向けて、大阪府単独事業をすべて廃止するという方針も出されています。職員のみなさんには、光熱水費や自動車使用などで無駄な経費の削減に努め、日々の支援業務では各市町村としっかり連携を取り、事業を進めてください。

「障害を受けることは、それ自体は必ずしも不幸ではありません。・・・障害は誰にでも起こりうるあたりまえの事象のひとつ。そんな障害者を不幸にしてしまう社会が不幸なのです。・・・弱い人を切り捨てる社会は、弱くもろい社会です。・・・」今から 30 年前に各地でよく言われた言葉です。

財政的に厳しいながらも、障害者政策を中央にすえ、街全体を活性化させる幸福的な先進的取り組みが、ヨーロッパや日本の各地で見られています。大阪もかつてはそのような地のひとつでした。時の為政者が、早くそのことにもう一度気づき、政策を見つけなおす時期が来るよう願いたいところです。【kobi】

「橋下色」事業 135 億円 大阪府新年度予算案 朝日新聞 2010 年 2 月 17 日

大阪府は 16 日、実質額で 3 兆 2 5 5 5 億円の 2010 年度一般会計当初予算案を発表した。橋下徹知事の就任後、2 年連続で赤字予算は回避され、低所得世帯の私立高校授業料の実質無償化（65 億円）など「知事重点事業」に約 135 億円を計上。財政難という制約のなか、限定的ながらも「前に進む施策」（知事）を盛り込んだ。

府の税収は、09 年度当初予算より 1726 億円少ない 9788 億円。柱の法人 2 税は 1264 億円減って 2051 億円となり、1975 年度の水準に落ち込んだ。国が将来手当てする臨時財政対策債の増発（1593 億円増）などで税収減を相殺している。

一方、歳出では「水都大阪・水辺のにぎわい創出」（9 億 6 千万円）街なかに絵を描く「おおさかキャンパス推進」（9600 万円）など 16 の知事重点事業を設定。府庁の本格移転を目指す大阪ワールドトレードセンタービルディング（WTC）の購入・整備に 117 億円を投じる。

これらの財源は、職員のボーナスカットといった人件費削減（09年度比129億円）などで対応。それでも不足する426億円は、09年度の黒字356億円と70億円の行政改革推進債で穴埋めした。

10年度予算案では「隠れ借金」との批判があった財政運営を見直し、特定目的基金からの6629億円の借り入れを解消する「減資」を実施。この会計上の処理で、形式上の予算総額は3兆9184億円となる。

さらに、りんくうタウンや箕面森町などの開発事業の含み損や赤字見通しが、合計約800億円に上ると初公表。知事は財政調整基金の積み立てで対応する方針を示した。

「ハシモトさん一家」の家計に例えると 大阪府22年度予算

（産経新聞2010年2月17日）

財政再建は進めているが、税収が大きく落ち込み、大阪府の財政の内実は大の車だ。架空の家族「ハシモトさん一家」の家計にたとえ、大阪府の財政が抱える問題点と橋下徹知事の狙いを探った。

2年前、赤字まみれの家計を立て直す決意をしたハシモトさん。苦しい台所事情から、ローンの返済に別口座で管理していた貯金を使うというやりくりをやめた。また、家族に窮状を訴え「収入の範囲でしか買い物はしない」ことに。食費を削り、教育費を減らして生活費を切りつめ、何とか黒字にできた。

《平成20年2月に就任した知事は、財政非常事態を宣言し減債基金からの借り入れをストップ。20年度は職員の給与や私学助成のカットなどで11年ぶりの黒字を達成した》ところが、長引く不況で給料は減り続けている。その一方でローンの返済や通院費など「どうしても必要なお金」はかさむ。

《企業業績の悪化は府財政を直撃し、税収は前年度比85%に。固定費を抑えることは難しく、社会保障関連の費用は225億円増となった》

実家からの仕送りが頼みの綱だが、実家がらみの冠婚葬祭の祝い金などが家計を苦しめていた。最初は言われるままに払っていたが「本当に必要か考え直そう」と提案。一部の出費を抑えた。また、家庭菜園のリース料を地主に値下げしてもらったり、入っていたサークルへの寄付を減らしたりした。

《府財政は国の財源に大きく依存しているが、国直轄事業への負担も重く、知事は「国は、ぼったくりバー」と批判。また、高額賃料が問題だったワッハ上方について、家主の吉本興業側に大幅な賃料値下げを求め、トラック協会などへの補助金も減額した》

今までは赤字の垂れ流しを止めるので精一杯だったが、3年目は「家族も楽しませたい」。家の周りをイルミネーションで飾ることや、みんなでジョギングやスイミングも始めることにした。だが、費用がないので自分の土地を切り売りして工面した。

《22年度予算案では御堂筋イルミネーションや大阪マラソン、川を泳げるように浄化する計画などが重点事業に。一方、府有地の売却収入を得た》

ただ、やりくりにも限界がみえてきた。「仕送りに頼る学生のような生活はやめたい」と決意し、周囲の友人と新しい事業を起こしたいと考えた。反対意見もあるが、「家族は支持してくれている」と自信満々だ。

《府民からの支持が高い橋下知事。国と地方のあり方を変え、自前の収入源を持てる道州制構想などを提唱しているが、近隣の知事からは否定的な意見もある》

